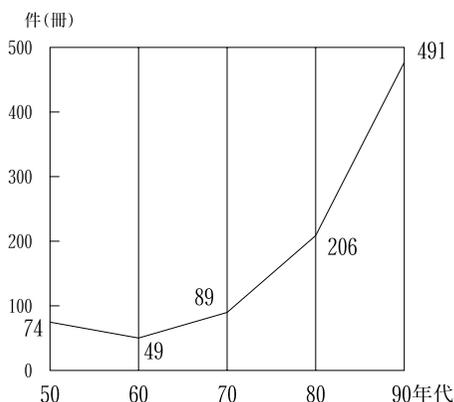


占いの宗教への変容*

—細木数子の「占い本」を事例として—

種 田 博 之**

図表 1



一. はじめに

今日、占いが巷にあふれている。書店では「占い本」が、雑貨店では「占い(ないしまじない)グッズ」が、繁華街には「占いのビル(ないし街)」やゲームセンターの「占い系ゲーム機」が、そして新聞・雑誌、情報系のテレビ番組などには「占い記事・コーナー」がある。こうした「占い産業」は一兆円規模にもなるようである。「占い産業」の典型的な例である「占い本」の出版状況は図表1のようになり、年々増加していることがわかる¹⁾。このように占いは日常生活のいろいろな場面で見ることができる。しかしながら、占いという知識は、今日の日本社会から見れば、あくまでも周辺的ないし逸脱的な知識でしかないだろう。例えば、ある世論調査—「こころと暮らし」全国世論調査(一九九一年一二月)によると、「占いを信じていない人」の割合は約7割にも達していることから窺える。しかし、人々の占いに対する意識はかなり微妙である。例えば、他の世論調査—読売全国世論調査(一九八八年七月)によれば、占いが「盛んになる」もしくは「現状のまま」とする人の割合は約8割にもおよんでいるからである。そして、上述のような占いが巷にあふれる現状もある。いわば占いは信じられていないかもしれないが、受容はされているのである。

占いは必ずしも信じられてはいない—周辺的な知識であることから、人々の占いの受容は安定性を欠く。すなわち、占いはいつ何時人々に拒絶さ

れても不思議ではない状況におかれているのである。こうした状況は、占いという知識の供給者である占い師にとっては、社会的承認という点や生計(経営)という点で、劣勢の状況である。占い師は占いという知識を人々に信じさせる、あるいは当該知識の人々による受容を安定させなくてはならず、そのための働きかけを人々(ないし社会)にしなくてはならない。とくに、占い(占い師)のような社会にとって周辺的な知識(マージナルマン)であればあるほど、当該社会に対して訴えかけることができる有効な働きかけをしなければ、現状さえも失いかねないだろう。では、占い師はどのように働きかけているであろうか。

占い師は、「占い本」を自分の占い(知識)とその正しさを、人々(社会)に示すための道具のひとつとして活用しうる。しかし、占いは社会にとって周辺的な知識であることから、占い師は自らの正しさを示すために、「占い本」によってた

*キーワード：占い、宗教(先祖崇拜)、正当化

**産業医科大学医学部専任講師

1) 図表1は JAPAN/MARC (1997/9/12現在) を用いて、「占い」・「タロット」・「運勢」・「易」・「四柱推命」・「手相」・「血液型占い」・「占星術」・「姓名判断」をキーワードにしての検索結果である(ただし、JAPAN/MARC は必ずしもすべてを網羅できているわけではない)。

だ一方的に自分の知識を提示しても無駄であろう。占い師は、当該知識を人々（社会）の承認をうるように（社会に適応したり、そのニーズに沿うように）、もしくは「正当性の信仰」を喚起するようにして、提示しなくてはならないだろう。言い換えると、「占い本」の言説（記述の在り方）およびその言説の変容を見ていくことによって、占い師がどのようにして社会的承認ないし正当性を得ようとしているのかということ、捉えることができるのである。また、「占い本」の言説—そこで使われている言葉（語彙）が人々の正当性をもたなくてはならないならば、この考察から、現代日本社会における正当性のある側面を一例えば「我々は何もしくはどのような知識を正しい知識として認識しているのか」といったことを照射することもできるだろう。

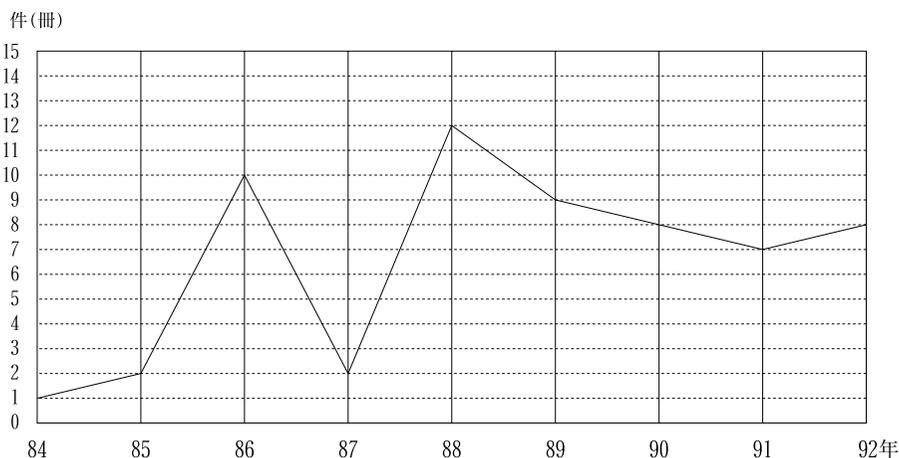
ところで、上述したように「占い本」の出版数は年々増加しており、ここでは当然その全てを取り扱えるわけではない。こうした出版状況のなかで、注目すべき類稀な占い師がいる。その占い師とは細木数子である。なぜ細木数子が注目すべき占い師であるかと言えば、それは、彼女が一九八二年以降、毎年、コンスタントに「占い本」を出

筆している占い師であり、とくに一九八五年以降その「占い本」はベストセラー的な売上を示す、今日の有名な占い師の一人であるからである（例えば一九九六年には9冊の本を出筆し総売上部数は二〇〇万部を超え、ほぼ毎年同様の売上を示しているようである）。細木が出筆・刊行した「占い本」の冊数を図表にしたものが、図表2である²⁾。とくに細木の「占い本」がベストセラー的な売上を示している点（そして一九八二年以降、毎年、「占い本」を出筆・刊行しているという点）から、彼女の「占い本」に資料を限定して、「占い本」の言説とその変容を考察していくことにする。

二. 「占い本」の言説とその変容—細木数子を事例として

細木数子が初めて「占い本」を刊行するのは一九八二年である。しかし一九八二年当時、細木は占い師として注目をあびることはなかった³⁾。少なくとも、細木が占い師として注目されだすのは一九八五年以降からで、これ以降、例えば雑誌に占い師として度々取り上げられている⁴⁾。また一九八五年以降、細木は「占い本」を1年間に複数

図表2



- 2) 図表2はJAPAN/MARC (1997/9/12現在)を用いて、「細木数子」をキーワードにしての検索結果である。JAPAN/MARCは必ずしもすべてを網羅できていないわけではない。例えば一九八六年以降、『六星占術による〇〇星人の運命』というタイトルの本が毎年6冊は刊行されているはずであるが、検索できなかった年がある。また図表2で省略した年について補足すると、一九八二年から一九八四年にかけて各々の年に1冊ずつ出版されている。一九九三年以降も、毎年複数冊出版されている(1993年: 9、1994年: 6、1995年: 9、1996年: 9)。
- 3) このことは、例えば刊行当時をふりかえって、細木数子自身が「思ったほどには支持されませんでした(『決定版大殺界に克つ相性』小学館、1988、10頁)」と語っていることから、わかる。
- 4) 細木数子は一九八三年に有名人とのゴシップでマスメディアに取り上げられている。細木が本格的に雑誌に占い師として現れるのは一九八六年からである[有名人(芸能人)の恋愛関係の破局などをあてたようである]。

冊刊行するようになり、多い年には1年間に12冊も刊行している。ここでは細木の「占い本」の分析に焦点をしぼることにし、彼女の経歴については必要最小限度の言及にとどめる。以下、細木数子の「占い本」を通して、彼女の占い技法がどのような内容であり、それが時間の経過とともにどのようにその内容を変えてきているのかについて、見ていこう。

1. 細木数子の占い技法＝「六星占術」の骨子

細木数子の最初の「占い本」は、一九八二年に出版された『六星占術による運命の読み方』である。しかし一九八二年当時、細木自身も回顧しているように、この本はあまり話題にならなかった。細木が占い師として注目された「占い本」は、一九八五年の『運命を読む六星占術入門』であり、この本はベストセラーになっている。一九八二年から一九八五年にかけて、数冊の「占い本」を出版しているが、内容的には全く同じものである。『六星占術による運命の読み方』と『運命を読む六星占術入門』とを中心にして、細木の占い技法＝「六星占術」の内容の骨子をまとめておく。

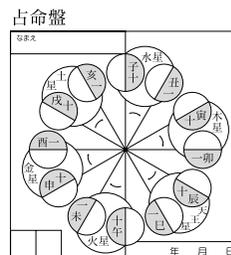
細木数子は自分の占い技法を「六星占術」と呼び、易などをもとにして自分で編み出した技法であるとする。端的に言えば、「六星占術」とは人の運命を「生年月日」により判断・占う方法である。人の運命は「運命星」・「相性」・「運命周期」によって支配されている。生年月日から人の「運命星」が決定する。運命星は基本的に<水星・土星・金星・火星・天王星・木星>の6つであり、人は生年月日から割り出された当該運命星の影響・支配を被る。運命星はそれぞれの特徴をもつ。そして、ある運命星のもとに生まれた人は、当該運命星の影響下にあるがゆえに、その星と同様に特徴づけられることになる。例えば水星を運命星

とする「水星人」は「クールで強烈な個性が売りもの(『運命を読む六星占術入門』ごま書房、1985、60頁)」といったぐあいに特徴づけられている。また、それぞれの星の間には「相性」がある。例えば、土星人と火星人は相性が悪く、この悪い相性が各々の人の運命に影響をおよぼす。運命に影響をおよぼすのは運命星における相性だけではない。「運命周期」と「運命周期」による相性もそうである。

「運命星」がわかったならば、それを「占命盤」に記載する⁵⁾。これによって、当該の人の「運命周期」がわかる。運命周期とは人の運命は12年周期によりなりたち動いているとする考え方である。運命周期は<種子・緑生・立花・健弱・達成・乱気・再会・財成・安定・陰影・停止・減退>の順からなる。とくに、12年のうちの5年—<健弱・乱気・陰影・停止・減退>—はとくに「殺界」と呼ばれる時期にあたり、この時期は不幸や災難が集中して訪れる運気がマイナスへと転じる時期である。この「殺界」は細木数子の占いの核をなし、彼女の占いを世に知らしめた代名詞である。運命周期ないし殺界は「自然界の摂理」であり、それからけっしてのがれることはできないものである。そして、殺界時期は何か新しいことを始めてはならない時期、あるいはそれ以外の時期に得たものを吐き出す時期であり、それらに反するようなことをすれば、後になってそのツケを払わなければならない。細木は数多くの事例をあげて、このことを説明している。

自分の意志と関係なく“殺界”時期に昇進してしまったために、思ってもみない不幸を招いてしまった人のひとりに、元横綱・双羽黒(北尾さん：著者註)がいます。～略～それは、たしかに自分の意志で起こしたことではないかもし

5) 「占命盤」とは以下のようなものである。



れません。しかし、「六星占術」に明確に示されている運命の法則は、あくまで、厳格です。それを甘んじて受けてしまった場合は、かならずそのしっぺ返しを受けなければならないということを、覚えておかななくてはなりません(『決定版大殺界に克つ相性』小学館、1988、139頁)。

また例えば誰かと何らかの事を始める場合、自分が殺界でなくとも、そのパートナーとの相性が自分の運気に影響をおよぼす。すなわち、運命星による相性の問題や運命周期による相性の問題(自分の運命周期が運気として良い時期にあったとしても、パートナーの運命周期が殺界にある場合にはその影響を被ることになる)によって、人の運命は変わっていく。このように細木の「六星占術」には運命決定論的な側面がある。細木はあくまでもこのような運命観を土台として、「六星占術」という占い技法を転ばぬ先の杖として自分の運気を読むための道具として位置づけている。したがって、この時期までの細木の「占い本」は純然たる占いであったと言えるだろう。しかし、一九八五年以降、細木の「占い本」もしくは「六星占術」はその様相を変えることになる。

2. 「六星占術」の新たな展開—宗教の組み込み=宗教化

一九八五年に細木数子は『運命を開く先祖のまつり方』という「占い本」を刊行している。この『運命を開く先祖のまつり方』は、細木の占い技法=「六星占術」ないし「占い本」にとって、重要である。なぜならば、このなかで展開された内容が、これ以降の「六星占術」に付け加わっていくことになるからである⁶⁾。言い換えると、『運命を開く先祖のまつり方』が出版される以前にはまったくみることのできなかつた要素が、これを境にして、現れ、次第に精緻化されていくのである。その要素とは「因果の法則」—「先祖供養(と

くに墓相、仏壇・神棚のまつり方)」・「自己修養」である。以下、これらについて見ていこう。

「因果の法則」とは、「人間が人間らしく生きていこうとする際に、絶対踏みはずしてはならない約束ごと(『六星占術の極意』主婦と生活社、1986、18頁)」であり、それを破った場合にはそれ相応の災厄を被ることになる、決まりごとである。その約束ごととは、家にまつわる規則—きちんとしたかたちで先祖を供養すること、離婚をしないこと、私生児をつくらないことなどで、そうした行為によって家の系図を乱すことをしてはならないとするものである。「因果の法則」の典型的なものとして、「先祖供養」と「自己修養」がある。「先祖供養」は、文字通り、先祖に対しての供養ないしは感謝の念をもってまつることであり、この点では常識的である。しかしながら、供養するうえで墓や仏壇が重要であるとし、墓や仏壇の作り方やまつり方をとくに強調する点で、独特である⁷⁾。墓の作り方については、どのような墓地が好ましいものであるとか、どのような墓石を選ぶべきであるとか、そして墓地にどのように墓石を配置しなくてはならないといった、細かい規定がされている。作ってはならない墓の例として、近年現れたロッカー形式の墓などを取り上げて、規定を守らないような墓を作ってしまうと、「因果の法則」によって自分や子孫に災厄がおよぶことになるかと警告している。次に「自己修養」である。細木は、「自己修養」を周りとの人間関係(先祖もふくむ)のなかで自分を省みて高めていく方法であるとし、とくに次の三点が重要であり、常日頃の心掛けとして持つておかななくてはならないと述べている。その三点とは、第一に「何にでも、常に感謝の気持ちを持つて接すること」、第二は「『恥を知る』という気持ちを持つこと」、第三は「自分に与えられた役割を、きちんと果たすこと」である(『宿命から立命へ—大殺界の乗りきり方』祥伝社、1986、188頁)。この「因果の

6) ただし、例外としてほぼ同時期ないしそれよりも若干遅く出版されている『運命を読む六星占術入門』は、『運命を開く先祖のまつり方』の影響を被ってなく—「先祖供養」などについてはいっさい触れられておらず、「六星占術」だけが述べられる内容になっている。

7) しかし、墓や仏壇の作り方やまつり方については「墓相学」の系譜を継承しており、細木数子の独創というわけではない。また、石材屋とタイアップしている(た)ようである。その石材屋は墓相を重視しており、その思想を細木は取り入れたようである。細木が影響をうけたその石材屋自体も「墓相学」の系譜を継承している。「墓相学」の系譜については対馬路人がごく簡単に概説している[対馬(1993)]。

法則]—「先祖供養」・「自己修養」は、なぜ主張されたのであろうか。そして、「六星占術」とはどのような関係にあるのであろうか。次に、これらのことについての細木の言い分を見ていこう。

細木数子は、「因果の法則」—「先祖供養」・「自己修養」を主張する理由を、大きく2つの点から述べている。第一は人の人としての原点への回帰のためである。現代社会のなかで人は人としてもっとも大切なことを忘れ、目先の利益に惑わされ、独りよがり、家族や子どものことに関心を払わなかったり、先祖を蔑ろにし、平気で売春まがいのことをして、正しい価値判断ができなくなっている。「六星占術」も単なる術として利用するだけで、人としての原点を見ようとししない。すなわち、「因果の法則」にかなった生活を送ることが最も大切なことであり、そのためには「先祖供養」と「自己修養」とが必要である。「先祖供養」と「自己修養」とは、人に人としての原点を見つめ直させる。そして、そのことによって人は神＝自然＝生命の源（大生命）から、恩恵＝生命力を授かることになる。先祖は今の自分の生命を生みだした存在であり、そして生命の源である神との接点であって、尊敬しなくてはならない存在である。「先祖供養」によって先祖ひいては神とつながることになり、その結果旺盛な生命力を授かる（「自己修養」の第一点の「感謝の気持ちを持つ」ということは先祖への感謝であれば、それは「先祖供養」ということになる）。反対に「先祖供養」を怠れば、神とのつながりが失われ、生命力が満たされることがないために、「神の間引き（『運命を開く先祖のまつり方』世界文化社、1985、4頁）」にあう。

生命に「最初」というものがあつたとして、それは宇宙とまったく同一のものだったと考えるのがいちばん自然です。宇宙とはつまり自然のことですし、自然とはいわば「神」のことです。～略～その「神」が、じつは先祖の生命を通じ

て私たちの生命にも連綿と流れ伝わっているわけです。となりますと、先祖を大切にしないということは、そうした「神」というか、私たちを支える根幹を大切にしないということになります（『運命を開く先祖のまつり方』世界文化社、1985、23頁）。

細木数子は第二の理由を「殺界」との関連—殺界の影響力を弱める方法もしくは殺界を乗り越える方法との関連で述べている。細木の占い技法＝「六星占術」において殺界はキーをなす。殺界とは運氣が衰える時期であり、そして運命周期の一環であるから、けっして逃れることができない時期である。また、この時期に何か新しい事を始めてはならず、もし始めている場合は後々の生活に悪いことが起きる。このように「六星占術」は運命決定論的である。そのために、読者が殺界の影響力を回避する方法をもとめたようである⁸⁾。細木は殺界からは逃れることができないという立場を堅持しつつも、殺界の影響力を弱める方法はあるとする。その方法を展開するために、「因果の法則」—「先祖供養」・「自己修養」が「六星占術」に組み込まれる。すなわち、「因果の法則」にかなった生活をする—「先祖供養」と「自己修養」とをしていくことによって、生命力が満たされて、殺界の影響力は弱まるとする。また組み込むために、細木は新しい概念を用い始める。それまでは「運命」という言葉しか用いられていなかったが、「運命」の代わりに「立命」と「宿命」という言葉を議論のなかに使用し出すのである。「宿命」とは自然法則であり、人知では変えることもさけることもできないものであり、それに対して「立命」とは宿命を積極的に活用して、自分の人生を変えていくことである。「宿命」を知るには「六星占術」が必要であり、そして「立命」をするには「因果の法則」をふまえて「先祖供養」と「自己修養」とを実践していくことが必要不可欠である。とくに、先祖は自分の生命を授けた存

8) 例えば、細木数子は次のように書いている。

この間の事情（殺界の時期に何か事を起こすと必ず不幸に襲われるということ）を：筆者註）をくわしく述べたところ、全国からたくさんのお問い合わせをいただきました。そして、その内容の大部分は「過去において大殺界で事を起こしている場合（たとえば、新婚～略～新築：著者註）、もはや救いがないのか」という、たいへん切実なものでした（『宿命から立命へ 大殺界の乗り越え方』祥伝社、1986、3頁）。

在であるから、「先祖供養」は「立命」するための最短の道である。

「立命」のために、最も大事なことは、自分の命を支えるもの、つまり自分の根っこをしっかりと、大地に根づかせることです。～略～先祖が、自分たちの存在の根っこなのです。とすれば、「立命」の最短の道は、先祖を供養することであることがわかります。～略～先祖を供養して、自分の根っこをしっかりとつけるということは、何でもないうでいて、現代人がすっかり忘れ去ろうとしていることです。しかし、これはじつはもっとも大切なことであり、「大殺界を乗りきる」道なのです（『宿命から立命へ 大殺界の乗りきり方』祥伝社、1986、31頁）。

このように、細木数子は「因果の法則」—「先祖供養」・「自己修養」という当初「六星占術」のなかにはまったくなかった要素を組み入れた。その結果として、「六星占術」はその様相を変え、「占い」というよりも「宗教」的となってきた。すなわち、当初「自然法則」=「運命星」・「運命周期」・「相性」を基軸とし、運命を説明していたのに対し、変容後は「神」や「先祖」といった宗教的ないしは超自然（超感性）的なものとの関係が基軸となり、運命を説明しだすのである。こうした宗教的な要素の組み込みによる変容を、ここでは「宗教化」と呼ぶことにする。この宗教化を、細木は「六星占術」の「深化（『決定版大殺界に克つ相性』小学館、1988、29頁）」と述べている。この変容が「深化」であるかどうかはともかくとして、ここには社会学的な含意が介在していると思われる。次に、そのことについて明らかにしよう。

三. 正当化のための資源としての宗教

細木数子の占い技法=「六星占術」の宗教化—占いへの宗教の組み込みによる変容は、どのようにすれば捉えることができるであろうか。宗教社会学の視点の一つとして、R. スタークとW. S. ペインブリッジによる「呪術から宗教へ〔個別（specific）から一般（general）へ〕」という視点がある〔Stark & Bainbridge (1985, 1987)〕⁹⁾。スタークらの議論を簡単にまとめるとすれば以下になる。呪術は、例えば「病気治し」のように、ある特定の具体的な目的のためになされる。呪術は経験的にその目的が達成されたかどうか確認される。そして、呪術は目的の達成に失敗した場合、論駁されることになる。それに対して、宗教は例えば「幸福な生活」といったぐあい一般的な私たちでその目的を措定し、その目的へと人々を動員する。その目的が具体的というよりも一般的であるために、論駁されにくい。したがって、呪術は論駁されないように、目的を個別具体的なものから一般化しなくてはならず、ここからスタークらは呪術は宗教へと展開していくことになるとしている。スタークらは、この「呪術から宗教へ」という枠組みを用いて、アメリカ合衆国における新宗教（例えば「サイエントロジー」）の運動展開を分析している¹⁰⁾。また、実際にスタークらは占いについては分析していないが、占星術を「世俗的呪術」と述べており、占いもこの枠組みで分析可能であることを示唆している。確かに、占いはこの枠組みを通して分析できるのかもしれない。そして、細木数子の占い技法である「六星占術」の宗教の組み込みによる変容=宗教化は、まさしく「占い」—「世俗的呪術」から宗教へと変容、展開してきているために、一見、スタークラ

9) R. スタークらの「呪術から宗教へ」の枠組みは、ともすると本文中の後半の議論で本稿が依拠している M. ヴェーバーによる「呪術からの解放（脱呪術化）」の議論に沿っているかのように見える。しかし、スタークらはこの枠組みを展開するうえで、全くヴェーバーに依拠していないようである。なぜならば、当該枠組みが提示されているところには、ヴェーバーの「呪術からの解放」という用語が用いられていないし、またヴェーバーの文献が参考文献としてもあがっていないからである。

また、ヴェーバーの「呪術からの解放」は、スタークらの呪術側の論駁回避という単純な議論ではないことにも留意する必要があるだろう〔折原（1969）〕。

10) R. スタークらの理論は、例えば R. ウォーリスらなどによって、スタークらが設定する概念や分析の経験的な妥当性などの点を、批判されている〔Wallis & Bruce (1986)〕。

の枠組みで分析できるように見える。しかし、「六星占術」の宗教化は、スタークらの枠組みでは分析できない。なぜならば、スタークらの議論の前提自体が「六星占術」の変容には妥当していないからである。

スタークらの「呪術から宗教へ」という枠組みには呪術側の論駁回避という前提がある。すなわち、スタークらの議論は、呪術は論駁ないし批判を回避するために、その目的を一般化し、そして一般化の過程のなかで宗教へと変容するというものである。しかし、細木数子の「六星占術」の宗教化はこの前提を共有していない。上述したように、細木が占い師として注目されるようになるのは一九八五年に出版された『運命を読む六星占術入門』（1985. 8. 5.）を契機としている。同じ年に、細木は「六星占術」の宗教化したヴァージョンの『運命を開く先祖のまつり方』（1985. 7. 20.）を出筆・刊行している。ここで留意すべきは、出版時期である。出版時期から、『運命を開く先祖のまつり方』は、細木を占い師たらしめた『運命を読む六星占術入門』とほぼ同時期あるいは若干早く出版されていることがわかる。つまり、このことは細木の「六星占術」が必ずしも占いに対する論駁や批判をかかわすために、占いに宗教を組み込んだ一宗教化しているわけではないことを示しているのである。また、実際対面の場で占いが施される場合、占いはある特定の目的に対して何らかの解決策を提示する。だが「占い本」の場合、その目的が特定化しにくいので、かなり一般的に書かれる傾向がある。このことは細木の「占い本」の場合もほぼ同様である。しかしながら、他方で、細木数子がとくに「先祖供養」を強調する時、先祖供養を怠った場合に引き起こされる事柄が事例からおどろおどろしく詳述されており、必ずしも一般化できているとは言い難い。これらの点も、スタークらの議論では捉えることができない。では、「六星占術」への宗教の組み込み一宗教化をどのように捉えればいいのかであろうか。

「六星占術」の宗教化を捉えるためには、別の視点を導入する必要がある。その視点を端的に言い表すとすれば、〈なぜ「宗教」なのか（もしくは「宗教」でなければならないのか）〉、ということになるだろう。確かに、上述したように

細木数子は「六星占術」の宗教化の理由を述べている。しかし、細木自身の言い分のなかにとどまって見るならば、彼女の言い分しかわからなく、それ以外のことはすべて抜け落ちてしまうことになる。言い換えれば、細木の言説一宗教化についての言い分も含めて一を、より広範な社会的な文脈のなかで捉えることで、宗教化ないし〈なぜ「宗教」なのか〉ということ捉えることができるだろう。したがって、この問題を捉えるために、占い師（・「占い本」）- 読者（市井の人々）の関係性についての視角から見よう。この視角は M. ヴェーバーのそれであり、そしてその視角は R. スタークには欠いているそれである。

ヴェーバーは一連の宗教社会学の研究のなかで、「平民的動機」に奉仕する呪術師・教団に関して、そして祭司・預言者・平信徒らの理念・利害関心による宗教の展開〔社会層と宗教（教義）との親和性〕について、指摘している〔ヴェーバー（1972, 1976）〕。すなわち、このヴェーバーの指摘は、（宗教的）専門家は自己の理念や利害関心のために、ただ一方的に自己の知識を提示しているのではなく、人々（社会）のそれらをふまえて、教義を体系化していっているということを明らかにしているのである。言い換えると、ヴェーバーの指摘は祭司（- 預言者）- 平信徒との間の相互連関に対しての視角であるだろう。このヴェーバーの視角は、占い師（・「占い本」）- 読者の連関からの把握の重要性を示唆する。また、ヴェーバーは支配関係が成り立つためには被服従者の当該支配に対しての「服従意欲」が必要であること、その「服従意欲」をひきだすためには当該支配に対する「正当性の信仰」が必要であること、そして支配（者）は被服従者に対して当該支配の「正当性の信仰」を喚起、育成しなくてはならないということを、指摘している〔ヴェーバー（1970）〕。このことは、どんなに強力な権力をもっている者でもその権力を一方的に行使したならば、支配は安定しないということである。まして先に述べたように、占い（占い師）は社会にとって必ずしも信じられているわけではない周辺的な知識（マージナルマン）でしかなく、被服従者一読者の「正当性の信仰」がなおさら必要となるだろう。つまり、この点でも〈占い師 - 読者〉の連関からの把

握が重要となることがわかる。

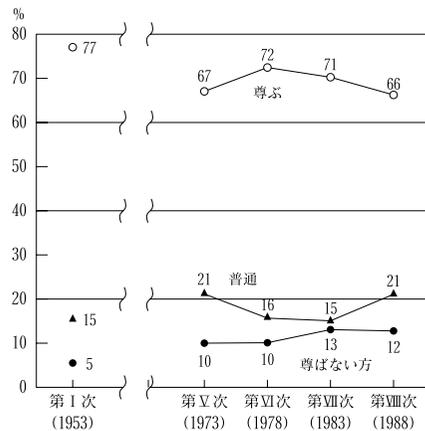
「古い本」は、古い師が人々（社会）に自分の古いとその正しさを主張できる道具のひとつでありうる。しかし上述したように、今日、占いは周辺のものではない。このような社会的状況では、古い師は自分の古い＝知識もしくは当該知識の妥当性を一方的に主張しても、その主張は必ずしも人々に伝わるものではない。古い師は人々からの承認あるいは「正当性の信仰」を喚起できるように、人々に適応したり、そのニーズに沿うようにして、知識を提示しなくてはならない（そのことによって生計をなす）。言い換えると、「古い本」の言説—そこで使われている言葉（語彙）は、人々の承認をうる、ないし「正当性の信仰」を喚起するものでなくてはならないと言えるだろう。

ところで、「古い本」の言説のなかでの表現の在り方に焦点をあてた研究として、鈴木健太郎によるものがある〔鈴木（1996）〕。鈴木は明治から昭和初期の「古い本」について考察し、古い（古い師）が信憑性をうるために既存の権威を利用していることを明らかにしている。すなわち、著名人に序文をよせてもらったり、古典を引用したりして、占いに信憑性を付与しようとしていたことを指摘している¹¹⁾。この鈴木の見解—権威の活用—は示唆的である。しかし、鈴木は権威という概念を日常用語的もしくは自明的に用いており、明確な概念規定をしていない。この点で鈴木の見解は補正されなくてはならない。ヴェーバーに沿って言えば、権威が「権威」となるためには、上でも指摘したように、「正当性の信仰」によって支えられていなければならない。つまり、鈴木のように権威から見るのではなく、当該権威を支える「正当性の信仰」から捉える必要があるのである。これらのことをふまえて、細木数子の言説の宗教化を捉えてみよう。

細木数子の古い技法＝「六星占術」に新たに付け加えられた要素とは「因果の法則」—「先祖供

養」と「自己修養」である。この「先祖供養」と「自己修養」という二つの要素は、人々に「正当性の信仰」を喚起させるのにはたして有効な資源（言葉）であるのだろうか。例えば「先祖供養」については、統計数理研究所の「国民性の研究」のなかに当該意識を問う項目があり、それを図表にすると図表3となる¹²⁾。これを見ればわかるように、「先祖供養」に対して肯定的な意識の状態にあると言える。逆に言えば、「先祖供養」の批判ないし否定は、人々の「正当性の信仰」を喚起させることが難しいということの意味しよう。また「自己修養」の点においても、細木の言説はきわめて通俗道徳的であり、これに異議をはさむことは「異邦人」とみなされることになりうる。言い換えれば、ここにおいても「正当性の信仰」を喚起させ難くなることになる。これらのことから、「先祖供養」と「自己修養」という二つの要素は、日本社会の価値観に照らして奇異なものではなく、むしろ連続性を持ち、人々の「正当性の信仰」を呼び起こすのに有効な資源であることが言える。すなわち、「六星占術」へのそれらの組み込み＝宗教化は、人々を説得する（人々を納得させ

図表3



（統計数理研究所国民性調査委員会編 1992 『第5日本人の国民性』出光書店）

11) 明治中期から末期にかけて活躍し名前がうれた古い師として高島嘉右衛門という人物がいる。「高島」という名称は古い界でのブランド名になる。その結果、高島嘉右衛門以降の古い師の多くが権威を呼び入れるために「高島」の名称を利用していることも、鈴木は指摘している。

12) 質問文は「あなたはどちらかといえば、先祖を尊ぶ方ですか、それとも尊ばないほうですか？」で、回答形式は「尊ぶ／普通／尊ばない方／その他〔記入〕」である。ちなみに一九九三年の調査では、「尊ぶ」：65%、「普通」：27%、「尊ばない方」：7%、「その他〔記入〕」：0%であった。

る)ための正当性を付与しているのである。

ところで、R. スタークらは宗教への変容を必然的なものとして見ていた。しかし既述したように、スタークたちの理論的前提は細木数子の言説の宗教化の場合は妥当していない。たとえ理論的前提を無視したとしても、宗教への変容はスタークらがみなすような必然的なものではない。なぜならば、細木の言説は、宗教だけでなく、その他いくつかの要素、例えば「科学」という言葉が用いられたり—『六星占術』は、不運を予知するための科学(『六星占術の極意』主婦と生活社、1986、132頁)、著名人や実例などの要素を組み入れ、当該言説の正当性を喚起しようとしているからである。言い換えると、宗教は正当性を喚起するために有効な資源であるが、しかしそれは正当性をうるためのいくつかある選択肢の一つではないのである。例えば、図表4は「先祖供養」にまつわる意識調査を年齢層で分けたものであり、ここから年齢層で意識に差異があることがわかる。この結果は、「先祖供養」は必ずしも正当性を喚起するための資源として機能しないかもしれないことも、示唆しているのである。すなわち、ここには留意すべき他の問題群が介在しているのである。

四. むすび

「六星占術」への「先祖供養」と「自己修養」の組み込みは、人々の「正当性の信仰」を喚起しうる。しかし、細木数子が主張する「先祖供養」と「自己修養」は保守的である。「先祖供養」においては直系による祭祀を重要視し、例えば次のように述べている。

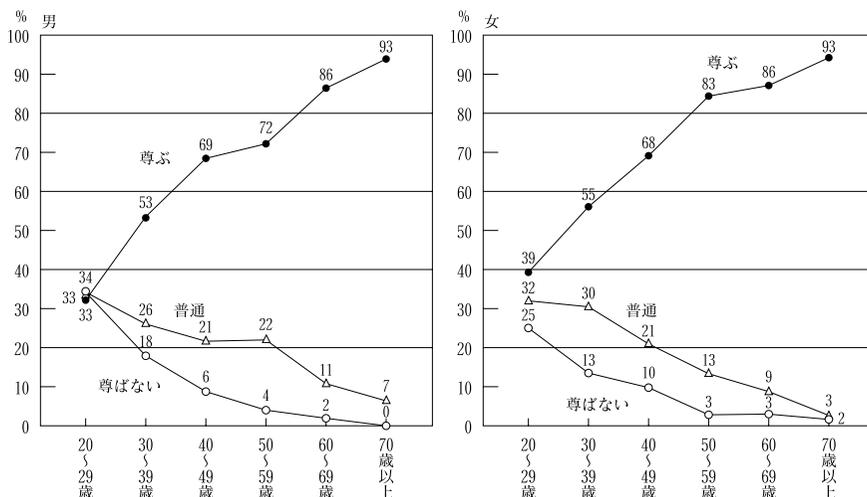
よく妻の先祖の位牌をまつている家を見かけます。本人は、親孝行のつもりなのでしょうが、これこそ絶対に冒してはならないタブーです(『宿命から立命へ 大殺界の乗りきり方』祥伝社、1986、101頁)。

「自己修養」においても、とくに女性に対しては女性の家を守るものであるとし、保守的である。

女性は結婚して家庭を持てば～略～外に働かずに出不いほうがいい～略～家庭を持つ身で仕事をしている女性の九九パーセントが、夫と子どもをダメにしてしまうからです(『立命のための宗教心の活かし方』祥伝社、1987、161頁)。

こうした細木数子の主張に対し、近年の「先祖供養」と「自己修養」の傾向は変容してきている。例えば孝本貢の研究によって、「先祖供養」は縁的先祖祭祀(自分たちにとって縁遠く知らない直系の先祖よりも、身近で知っている双系的な先祖

図表4



(統計数理研究所国民性調査委員会編 1992 『第5日本人の国民性』 出光書店)

を祀ること)へと変容してきていることが明らかになってきている〔孝本(1978)〕。また図表4でわかるように、とくに「先祖供養」においては年齢層で受容に差異を見ることができる。こうしたことから、細木の言説を「誰」—いかなる「社会層」が需要(ないし受容)しているのかという問題が浮かび上がってくる¹³⁾。この問題は、細木の「占い本」だけに限らず、占い全体の問題である。一例をあげれば、若い女性向けの雑誌による占いの特集号における言説は、細木数子が強調するような「先祖供養」や「自己修養」という要素を欠きわめて対照的なそれである¹⁴⁾。このことは、大きく二つのことを含意している。第一は、上述の問題、それぞれの占い師(ないしその「占い本」)、もしくは様々な占い技法を需要(受容)する担い手=「社会層」の問題である。第二は、各々の占い師(「占い本」)や占い技法の言説における表現様式の問題である。この二つの問題は連関している。すなわち、例えば細木数子の言説と若い女性向けの雑誌の言説の差異から、ある社会層と親和性をもつ言説の表現様式があることが見えてくるだろう。あるいは、時間軸を設定することで、時間のなかでの言説の差異や変容を捉えることもできるだろう。つまり、時系列のなかで当該社会層と連関する各々の言説の表現様式があること、そしてそれらを類型化することができることを示唆しているのである。またこれまでに、占いを正当化するために、いくつかの資源が活用されていることを論じてきた。とくに、「宗教」や「科学」といった対極的な位置にある資源が、何の矛盾も感じさせることなくリンクして、占いを正当化している。このことは、人々ないし民衆の知識構造が「プリコラージュ」をなしていることを示唆している。人々(民衆)の知識における知識構造の構成—知識のリンクはどのようなものなのだろう

か。今後、こうした問題群を明らかにしていかななくてはならない。

参考文献

- 孝本貢 1978 「都市家族における先祖祭祀観—系譜的
先祖祭祀観から縁の先祖祭祀観へ」 宗教社会学研
究会編『現代宗教への視角』 雄山閣
- 折原浩 1969 『危機における人間と学問』 未来社
- Stark, R. & W. S. Bainbridge 1985 *The Future of Religion*. Berkeley: Univ. of Cal. Pr.
- Stark, R. & W. S. Bainbridge 1987 *The Theory of Religion*. New York: Peter Lang.
- 鈴木健太郎 1996 「占い本と近代」 島蘭進他編『消
費される<宗教>』 春秋社
- 統計数理研究所 1994 『統計数理研究所研究リポート
75』
- 統計数理研究所国民性調査委員会編 1992 『第5日本
人の国民性』 出光書店
- 対馬路人 1993 「日本の墓相学」 藤井正雄他編『家
族と墓』 早稲田大学出版部
- Wallis, R & S. Bruce 1986 *Sociological Theory, Religion and Collective Action*. Belfast: The Queen's Univ.
- ヴェーバー, M. 1970 『支配の諸類型』 世良晃志郎
訳 創文社
- ヴェーバー, M. 1972 『宗教社会学論選』 大塚久雄
他訳 みすず書房
- ヴェーバー, M. 1976 『宗教社会学』 武藤一雄他訳
創文社

13) 近年の細木数子の「占い本」は必ずしも「先祖供養」や「自己修養」を強調しているわけではない。とくに一九九〇年代の前半に靈感商法がらみで訴えられたりしており、この時以降、「先祖供養」を前面にだすことをひかえている。また、こうした「先祖供養」などを前面にださないようなやり方は読者層—若年層を念頭に入れてのやり方であるかもしれない。とくに九〇年代以降の『六星占術による〇〇星人の運命』については、オウム真理教の事件があった年に出版された九六年度版を除いて、宗教色—「先祖供養」などを欠いている。

14) 西洋占星術を特集している場合〔例『CREA 3月号』(文藝春秋社、1999)〕、「先祖供養」という言葉は全くみることができない。また、細木数子の占い技法と相対的に類縁性がある、すなわち、中国の易にバックボーンがあると称する占い技法—例えば『AN・AN 特別編集版 鬼谷算命学 SPECIAL』(マガジンハウス社、1998)の場合も、このことは同様である。

Transforming Fortunetelling into Religion

—An Analysis of Books on Fortunetelling by *Kazuko Hosogi*—

ABSTRACT

Fortunetelling does not necessarily make people demand and accept as truth in present Japanese society. Fortunetelling is not a form of institutional knowledge. In order to convince people of their fortunetelling (knowledge) and to ready to accept it, fortunetellers need to legitimate their works. Fortunetellers tend to incorporate knowledges which people accept as truth to legitimate their fortunetelling. One such type of knowledge is religion. Thus, the purpose of this paper is to show that fortuneteller—*Kazuko Hosogi* uses religion to legitimate her fortunetelling, analyzing *Hosogi's* fortunetelling books.

Kazuko Hosogi is one of the famous fortunetellers in present Japanese society. *Hosogi* has written many books on fortunetelling, and they are widely read. Fortunetelling for *Hosogi* was a kind of astrology at first. But *Hosogi's* fortunetelling has transformed into religion. That is, in order to legitimate her fortunetelling and give it plausibility, *Hosogi* has incorporated religion—especially ancestor worship in her fortunetelling.

Key Words: Fortunetelling, Religion (Ancestor Worship), Legitimation